

政策課題討議 講義編

第1節「政策課題討議」試験の概要

✧ 主旨・内容（人事院募集要項より）

課題に対するグループ討議によるプレゼンテーション能力やコミュニケーション力などについての試験（院卒区分の場合、「課題に関する資料の中に英文によるものを含む」と明記。）

配点：教養区分 4 / 28（総合論文の半分）、院卒区分 2 / 15

（注）2026年度試験より、配点が変更される。

教養区分：4 / 24（春試験・秋試験共通）

院卒区分：2025年8月現在、未公表（変化なしの可能性が高い）

⇒ 教養区分、院卒区分ともに、試験全体に占める政策課題討議の配点比重はあまり高くない。しかし、官庁訪問において、グループディスカッションを導入している省庁が増加しているため、ほとんどすべての総合職志望者にとって、政策課題討議対策の重要性は高まっている。

✧ 試験実施方法

＜教養区分＞ 6人1組のグループを基本として実施

レジュメ作成（20分）→個別発表（1人当たり3分）→グループ討議（45分）

→討議を踏まえて考えたことを個別発表（1人当たり2分）（おおよそ2時間）

＜院卒区分＞ 6人1組のグループを基本として実施

レジュメ作成（25分）→個別発表（1人当たり3分）→グループ討議（30分）

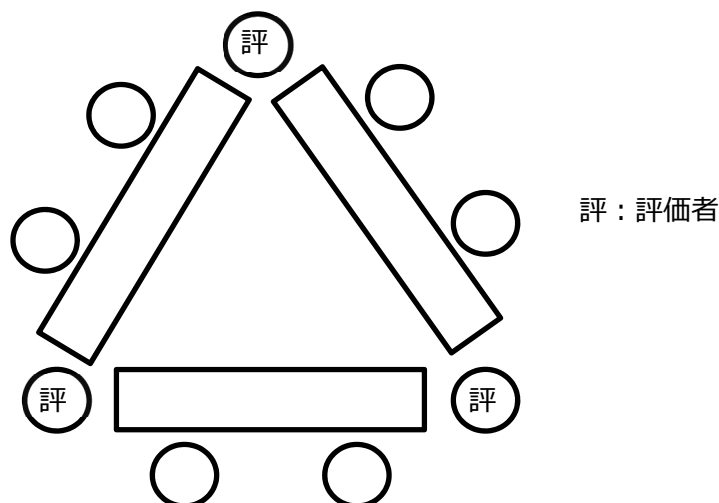
→討議を踏まえて考えたことを個別発表（1人当たり2分）（おおよそ1.5時間）

①60人ほどの受験生が一度に集められ、課題についてレジュメを作成する。

②時間になったら、問題・資料含めすべて回収される。

～休憩（10分間）～

③座席が三角形の形に配置され、各辺に2名、計6名1グループがつくられ（下図参照）、6人分のレジュメコピーが全員に配布される。



- ④先に作成したレジュメ内容に従い、個別発表（持ち時間 3 分間）。他メンバーは発表者のレジュメを見ながら話を聞く。
- ⑤発表後、ホチキス留めされた他の人のレジュメを読む（5 分間）。
- ⑥グループ討議開始（評価者は、三角形の各頂点に 1 名の計 3 名、他に監督官、時計係各 1 名。なお、時間は上記のように教養区分、院卒区分で異なる）
- ＜注＞ 討議中は、メンバー同士は番号（例えば、61 番さん、というように）で呼称し合う
- ⑦討議終了後、各自で考えをまとめる（5 分間）。
- ⑧討議を踏まえて、最終の個別発表（持ち時間 2 分間）

＝＝

＜注意＞

コロナ禍において、政策課題討議試験は規模の短縮化が図られていた。例えば、2021 年教養区分試験は、下記のような形式で実施された。

6 人 1 組のグループを基本として実施

レジュメ作成（20 分）→個別発表（1 人当たり 2 分）→グループ討議（30 分）

現在はコロナ禍以前の方法に戻っているが、短縮化で試験が滞りなく実施できていたということは、言い換えれば、**政策課題討議試験は発言の内容よりも、討議が問題なく進行できているかどうか**が重要視されているといえる。すなわち、「討議にほとんど入れていない」「討議の流れと関係なく、自分の言いたいことしか言わない」等のネガティブ・チェックの要素が強い。それゆえ、「評価者の印象に残るような発言を常に心がけよう！」といった、妙な気負いは全く必要ない。

- ★ 例年だと、この後に人事院面接（15～20 分程度）があるので、当日はかなりのハードスケジュールになります！（近年はグループによっては、面接、討議の順番で行われるので、その場合は面接でかなり深く突っ込まれても気落ちせず、政策課題討議に臨むだけの心臓の強さが求められる）
- また、教養区分の場合は、前日に企画提案試験があるので、院卒行政に比べかなりきついです！

☀ 評価について

総合判定	A	B	C	D	E
標準点（2025 院卒）	117	92	63	33	—
標準点（2024 教養）	124	95	66	37	—

総合判定が E の場合は、他の試験種目の成績にかかわらず不合格となる。

【参考】本試験における各区分の最終合格点（いずれも 1000 点満点）

2025 年院卒区分（行政）：301 点、2024 年教養区分：518 点